

発達障害児の「特性に応じた指導」に関する疑問

—診断のための症状は指導の手がかりになるか—

久田 信行

（群馬医療福祉大学 社会福祉学部）

KEYWORDS： 発達障害 特性 指導方法

【問題】

発達障害児の指導において「特性に応じた指導」という言葉が用いられる様になり、今日では、多くの障害児について「特性に応じた指導」が不可欠とされるに到っている。

知的障害児の特性に応じた指導という場合、抽象的思考が困難という特性があるので、具体的な生活の諸々の事柄を学習する中で、言語や数量などを学習するように指導する。この用法の場合、「特性」は教育上重要な児童の心理的特徴として、従来から用いていたため抵抗感が少ないが、現在の用法は、症状と混同され、いくつもの矛盾を生んでいる。

この小論では、「特性に応じた指導」という考え方を点検して、どのような問題があるか、どのような考え方をすべきかについて検討する。なお、本発表は研究倫理上の問題はない。

【定義】

最初に、「特性に応じた指導」の「特性」について、本論での定義を指定する。久田信行（2013）は、図（図は改変）のように、障害特性、共通性、個性を分けて説明している。

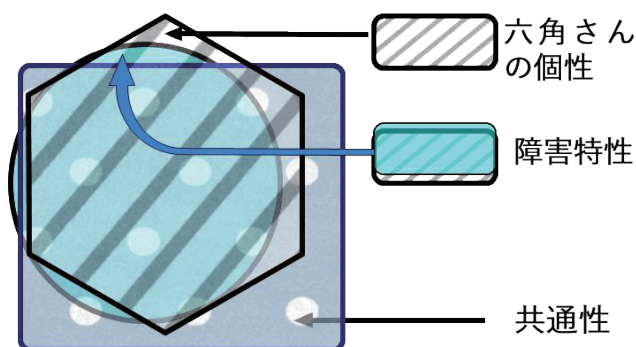


図 個性・障害特性・共通性

丸さんと六角さんが ADHD と仮定すると、ADHD の人の重なる部分から、共通性の部分を除いた部分が障害の「特性」となる。図では「特性」が目立つ様に描いているが、実際は共通性が大部分を占める。

この図で、六角さんと丸さんが ADHD と仮定する。四角の部分は、集団における共通性の範囲とする。こう仮定して、六角さんを例に、領域を定義していく。

六角さんと丸さんが重なる部分で、かつ、四角の共通性の範囲とは異なる部分が ADHD の障害ゆえの特性「障害特性」ということになる。六角さんについて他の者と重ならない独自の部分は、六角さんの「個性」と呼ぶことにする。六角さんと丸さんの共通部分の多くは、四角の範囲つまり「共通性」に含まれる。

なお、四角さんという障害の無い人（いわゆる定型発達という幻想）がいてと仮定するより、四角は集団の共通性の範囲とした。集団としては共通の部分幅広く持っていて、様々な人が布置してアイデアとしての共通部分を形成し、ノーマルなどと形容されると考えられる。

【特性は、ほぼ症状(症候)】

ADHD の特性で代表的なのは、不注意、衝動性、多動性である。これらの特性は DSM-5 などの診断分類体系において診断を行う際に注目されている症状（行動特徴）である。症状

は病理学に基礎を置いた考え方で、独特の取捨選択が行われている。以前は、9 以上の症状があげられていたりしていた。

例えば、「多動性」の扱いを比較してみよう。学校で多動行動への対応に苦勞する ADHD の場合、成人でも持続する症状は注意障害と考えられ、多動性より注意欠如が重視された名称を用いている。自閉症の児童でも多動性はかなりの頻度で見られる行動特徴であるが、自閉症の症状として多動性が挙げられることは希である。成長するとその症状は少なくなると考えられており、自閉症の症状には普通挙げられない。

このように、症状は個人の病理を範疇化するための指標であり、教育的ニーズとは異なる観点から選ばれている。

【社会的要因などの欠如】

特性（症状）の最大の欠点は、周囲の状況や友人といった要因が欠落している点である。あくまで個人の特性に注目するので、所属する集団、例えば学級経営の問題など社会的要因が無視される。ニーズのごく一部だけに焦点を当てて、原因を個人の症状に還元するという誤謬が生じる。

ある ADHD と診断されている 2 年生の児童が、授業中に 3 回離席したとする。1 時限に 3 回も離席するから多動性があるという判断は、医師にとっては意味があるろう。しかし、教師にとって意味のある観察だろうか。

その児童に離席の理由を聞くと、1 回目はトイレに行くため、2 回目は隣の子が退屈になって当該児童の太股を鉛筆で突いたため、3 回目は授業の途中で難しい言葉が出てきて、全く分からなくなったため離席したと答えた。同じ離席という「症状(特性)」に数えられるが、理由は異なる。理由が分かると、1 番目に対しては、席を立つとき、教師にトイレに行って良いか聞くよう指導し、2 番目は隣の児童に注意して対処し、3 番目は、分からないときのサインを決めて、即座に支援できるようにするなど支援の方途が見つかる。

【結語】

以上のように、今日、発達障害児の特性として教科書にも書かれている諸特性は、DSM などに挙げられている症状そのままである。診断の際に注目する特性(症状)と、教育上の特性(特徴)は元々異なる次元であるが、それが混同されているため、今日さまざまな混乱を招来している。目の前の児童の行動を、症状と同義の「発達障害児の特性」という色眼鏡を外して改めてみて欲しい。すると、児童の困難や教育的ニーズがより良くみえてくるのではなからうか。

もう一つ支援を考えるとときに大事な視点がある。図に示したように、障害の特性は、児童の諸機能のごく一部の特徴であって、ほとんどの機能は他の児童とほぼ同じである。教育的支援の主たる部分は共通性への働きかけである。自立活動の内容にしても、多くの場合はその共通性へ働きかけている。

教師は、症状よりも、児童の良さや困難を示す特徴や学習の癖や状況、友人の支援など、ある状況でより良い体験が出来るための諸条件に焦点を当てる方が生産的と思われる。したがって「特性に応じた指導」という標語は疑問である。

【文献】久田信行（2013）特別支援教育の進展と発達障害児に対する支援，特別支援教育研究，669 号，2-6.

(HISATA Nobuyuki)